

ドル底堅さとクロス円の円高動向にらむ

FRB幹部発言と今後の政策、米債入札、感染など焦点

今週の為替相場は全般的なドルの底堅さと、クロス円を中心とした根強い円高・外貨安の圧力について、持続性と反動修正をにらんだ展開が想定される。週間予想はドル/円が109.70-111.30円、ユーロ/円は128.80-130.30円。前週は世界的なコロナ感染の再拡大や各国経済の減速懸念などでリスク回避の円高場面があったが、前週末には米国の雇用統計改善と米FRBの金融緩和見直し観測などでドル高が支援されている。今週はFRB幹部発言と政策の行方、米指標、米国債入札、内外感染動向などが焦点になる。

FRB緩和見直しはドル支援、リスク回避なら円高要因

今週の為替相場で注目されるのは、米FRBの幹部発言と金融政策の行方だ。前週末には米国の7月雇用統計や失業率が改善となり、FRBの量的緩和縮小（テーパリング）論議の前進や利上げ時期の前倒しなどが意識されている。

FRBについては、8月26-28日に米ワイオミング州ジャクソンホールでカンザスシティ連銀主催の国際経済シンポジウム（ジャクソンホール会議）という重要会合が控えている。同会議に向けてFRB幹部から緩和見直しの「地ならし前進」発言が見られると、全般的なドル高とドル/円でのドル下限切り上がりが支援されやすい。

一方で世界的に変異種などのコロナ感染が再増加するなか、FRBの緩和見直しは米国株を含めた各国の株安とリスク回避の要因となる。今週以降に米国株などの世界株の下落や原油など資源相場の下落が続くと、クロス円主導で円高・外貨安の場面も意識されそうだ。

しかもFRB緩和見直しとドル高は、対ドルで欧州通貨（ユーロ、ポンド、スイス・フランなど）や資源国通貨（豪ドル、NZドル、カナダ・ドル、南アフリカ・ランド、メキシコ・ペソなど）の下落材料となる。対円でも、こうした非ドル通貨に連れ安の圧力が掛かりやすい（円高）。同時に世界感染増と世界減速懸念、FRB緩和見直し観測などで、原油を始めとした資源相場の下落が続くと、資源国通貨は下押しのリスクが警戒される。

その意味で今週以降は、世界的な感染抑制やワクチン期待などで株高や資源高が見られると、ドル/円、クロス円でリスク選好の円安・外貨高が進展。反対に世界感染の一段の拡大や、各国の経済指標悪化、中国政府による規制強化の拡大といった悪材料がクローズアップされると、クロス円主導での円高・外貨安（ドル/円はドル上げ渋りや小幅なドル安・円高）という一喜一憂の手探り相場となりやすい。

米株市場ではリスク回避の尺度であり、米株投資家の不安心理を映すシカゴ・オプション取引所（CBOE）ボラティリティ（VIX）指数が、最新8月9日に16.72となっている。直近最高のリスク回避方向である7月25日の25.09以降は、市場安定化の節目である20割れが維持されたままだ（リスク選好方向）。

それでも日足テクニカルの一目均衡表では、重要な上限節目ラインである先行

スパン・雲下限17.08（9日時点）の上抜け攻防に直面してきた。すでに8月以降には雲下限の一時的な上抜けも見られているが、これから上下動を経ながらも雲下限を上抜け定着してくると、テクニカル面でVIXの上昇余地が拡大（リスク回避と米株安の方向）。過去実績では、雲上限（今回は9日から31日まで21.51に位置）に向けたVIXの上昇モメンタム点火が警戒される。

最近では今年5月、2-3月、昨年9月、6月などで、雲下限の上抜けと雲上限までのVIX上昇加速が観測されてきた。いずれも短期的な米国株の調整下落と日本株の連れ安、為替相場でのリスク回避によるクロス円主導での円高、対円以外での安全逃避によるドル高などが連動進展となってきた実績を有している。その他の注目ポイントは以下の通り。

<ドル/円の週足、13週線や24週線などの維持焦点>

為替相場の短中期トレンド判断で参考になるのが週足テクニカルだ。10日のアジア市場時点レートでドル/円の週足は、下値メドとして4週移動平均線110.24円前後、一目均均衡表の転換線110.19円前後、13週線110.11円前後、24週線109.66円前後、26週線109.38円前後などが注目される。

各ラインともトレンド方向を示す方向角度は、上向き化となっている。各ラインの上向き化が維持されている限りは、一時的なドル安と下抜け場面があっても、前週のように早期の上抜け回復が支援されやすい。反対に各ラインを下抜けたあと、下抜けの滞留時間が長くなったり、各ラインの方向角度が下向きに転換してくると、ドルの上値の重さが示唆されていく。各ラインなどを上値メドとした戻り売り圧力の強まりと、下値模索方向へのトレンド転換が後押しされる余地も残されている。

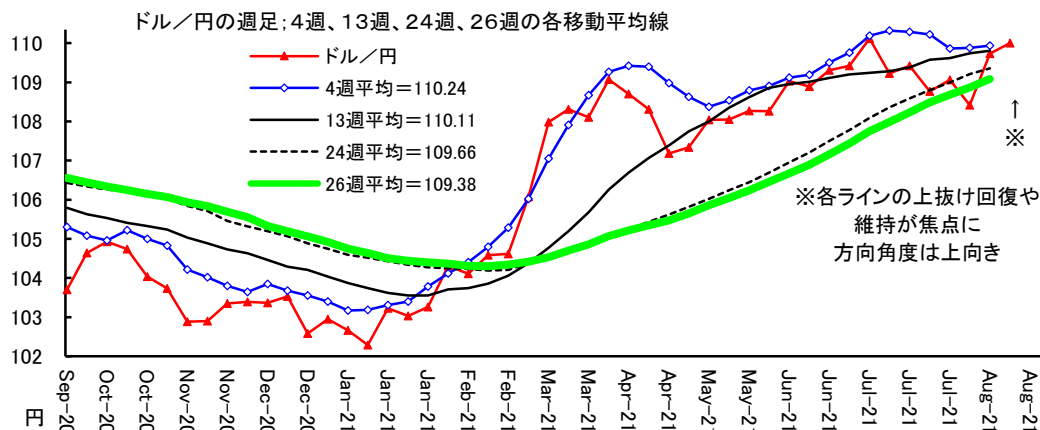
<米国債入札、需要動向が米金利とドルを左右>

今週の米国債市場では、米財務省が入札を実施する。10日に3年債、11日に10年債、12日に30年債の入札予定となっているが、前週末の米雇用統計の改善を受けて、米FRBによる米債買い入れ（量的緩和）の縮小や先行きの利上げが警戒され始めた。ただでさえ米国債は6月以降の金利急低下と債券価格の急騰を受けて、債券価格面で割高過熱感が意識されている。その中で米債入札が低調となれば、米債金利の上昇へと作用。為替相場では全般的なドル高が後押しされる。

一方で現在は世界的なコロナ感染の再増加などで、世界的に金利が再低下となっている。米FRB以外の先進国では、中銀による緩和見直しや利上げの時期に不透明感が漂い始めた。それに対して米国債は金利低下でも一定のプラス金利水準が保たれており、米国内外のマネーによる旺盛な需要が示される可能性も消えていない。その場合は改めて米債金利が低下となり（米債価格は上昇）、全般的なドル安の要因となってくる。

<中国の感染再増加と景気減速懸念>

中国では前週以降、変異種を含めたコロナ感染が再増加となってきた。連動す



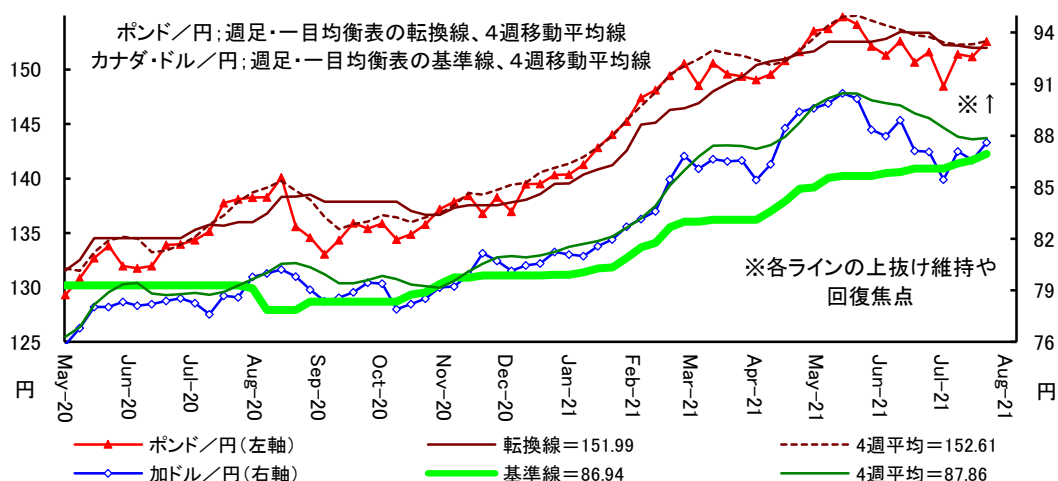
る形で米国の大手金融機関は、感染再増加などを理由として中国経済の成長見通しを下方修正させている。その中で中国では政府当局がハイテク、ゲーム、学習塾、不動産関連などへの規制強化を連打させており、中国株を始めとした世界株安とリスク回避の材料となってきた。

米ウォールストリート・ジャーナル紙は6日、「中国の企業締め付け、まだ始まったばかり」、「共産党の目標への貢献求め、圧力強める構え」と報じたばかりだ。同時進行で中国は米国との緊張対立も激化している。引き続き為替相場では「中国発の悪材料」が、おりにふれてリスク回避の中国株安・日米株安・円高となる可能性や、中国経済と相関性の高い資源国通貨の下落材料となる局面が注視される。

<クロス円の週足、転換線や基準線、4週線の攻防>

為替相場の短中期トレンド判断で、参考になるのが週足テクニカルだ。主要クロス円取引では、6月以降の外貨安・円高進行を経て、8月以降は外貨の下げ止まりからの反発、もしくは根強い外貨の戻り売り圧力に押される形での外貨の一段安（円高）を巡る攻防に直面している。

週足テクニカルでは節目ラインとして、一目均衡表の転換線や基準線、4週移動平均線などを巡る攻防となってきた。先行き上下動を経ながらも、各ラインの回復や上抜け維持となれば外貨安が一服。各ラインなどを下値メドとした下値の切り上がり回帰が意識されやすい。反対に各ラインなどを完全に割り込むと、改めて下落エネルギーの強まりが確認されていく。各ラインなどを上値メドとした外貨の戻り売りと、下値余地模索の流れが後押しされる可能性を秘めている。



お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。